

扶 桑

おやま道をたどる ④

西宮本殿の右側の石段を登った先の白木の鳥居が登山門です。ここから登山道が始まります。開山前夜祭には手力男命がしめ縄を切り落とす儀式が行われます。



この石段の奥のお宮は「祖霊社」で御開祖長谷川角行師・村上光清師・食身身祿師が祀られています。



「登山門を出て南行す。三町許にして左傍に一堆邱あり大塚と云ふ。日本武尊の小祠あり、尊違拝の古跡と云。」と『隔搔録』に

記されている「大塚丘」は、登山道の左手にあります。



開山祭では、斎藤先達によって御焚き上げが行われます。



ここからは、しばらく変化の無い道が続きます。途中で「胎内道」を過ぎ、やつとの思いで辿り着いた「泉端」の入り口の反対側に「雪山籠記念碑」があります。あまり注目される碑ではないのですが、先年、この碑に係る資料が発見されました。この碑に書か

れた雪山登山を達成された御本人の写真が見つかったのです。(本紙が初公開です)現在でも困難な冬富士に簡素な装備で挑まれた雄姿をご覧ください。



雪山籠記念碑

『上吉田の石造物』(富士吉田市史編さん室)より

原照原氏富士山頂参籠ノ由来及其実況

皇祖主神教主原氏(幼時ヨリ心身ノ口養ヲ励ミ敬神ノ志篤ク特ニ武道ニ志シ常ニ吾国躰ノ基礎ハ皇口ノ無窮ニアル事ノ唱導セリ大正五年ノ一月 聖寿ノ萬歳國家ノ安泰を祈願スヘク其淨域ノ靈峰富士ノ山頂ニトシケ年間寒中大行ヲ発願セリ大正五六年ノ二年ハ富士山東口ヨリ登山大正七年ハ満願ヲ果スヘク往古ヨリ歴史的ノ由来アル北口ヨリ登岳ス寒三十四日間頂上ニ参籠シテ其折口 果セリ実ニ神力ノ加護ニアラスンハ為シ得サル事ナリ誠ニ空前絶後の大行ナリ茲于其現況ヲ録シ後口ニ伝フ云爾

原氏ハ大正十年一月六日御師菊田氏ノ家ヨリ強力米吉ヲ伴ヒ発足ス一合目裸ニテ身ヲ清メ其夜五合目一〇〇〇日口合上ニテ強力二分レ夫レヨリ単身登岳八日夜六合九勺「テ無事ヲ報ス九日夜七合三勺又信火十二日夜八合ヨ」「三日二十七日二月二日四日前後四回頂上ヨリ復信火」「雪知人皆生還ヲ期セサリシニ八日午前十時無事下」「臆ヲ寒カラシメ勢美ニ神威ノ蔽ナル事ヲ感セ」「登山ノ携帯食料品ハ蕎麦粉ニ升梅干生姜」「三十個ノミナリキ

以上(当時岳麓人士ノ実視セル所ナリ)

大正十年一月

東京信口 岳麓有志者建之

正三位勲四等男爵藤枝雅之篆額

戸川安宅撰文 川村努書

石工 佐野平作



像肖氏原照原 者籠参中寒

更に一本道を行くと「中の茶屋」に辿り着きます。ここは北口登山道最初の茶屋で、昭和六十三年まで営業していた建物は左のように新築されました。それも現在では夏季のみの営業となり、北口登山道の衰退を思われます。

